

「～という」の文法化 - 逆接表現との共起 -

家田章子

名古屋女子大学非常勤講師

iedasjp@yahoo.co.jp

1. はじめに

1.1 考察の対象

本発表では、まず「～という」の一般的な用法¹⁾について、文法化という視点から分析する。また、特に「～という」の後に逆接表現が現れた場合、その文法化の度合いにどのような違いがあるのかを考え、ひとまとまりのコロケーションとして、どのような用法としてとらえるべきか考察する。

1.2 文法化とは

大堀(2004)によると、文法化とは「語彙的要素(動詞、名詞など)が意味的に抽象化し、文法的要素(とりわけ膠着的接辞/屈折形態)となったもの」と定義される。²⁾この定義に従い、「～という」の様々な用法を分析してみると、「言う」の持つ本来の語彙的要素が抽象化されたものが数多くある。

2. 「言う」の語彙的要素の抽象化

2.1 「～という」の一般的な用法

本来、「と」と「言う」が組み合わさった「～という」は実際に発話される、誰かが言う、という意味である。この本来の用法だけでなく、「～と(誰かが)言ったのを聞いた」という引用(伝聞)の用法や、「AというB」のような名詞修飾の用法などもある。名詞修飾の用法は、単なる内容を表す場合には使いにくく、話したり聞いたりした内容を表す場合に用いられるのが基本である。

本動詞の「～という」

(1)山田さんが「やりたくない。」というので、別の人に頼んだ。

(2)山田さんがやりたくないというので、別の人に頼んだ。

引用（伝聞）の「～という」

- (3)山手グリーンロードという道はどこですか。
- (4)先月の洪水で100人以上の死者が出たという。

名詞修飾の「～という」

- (5)リンさんがこの大学の先生になるといううわさを聞いた。
- (6)名古屋に地下鉄の環状線ができるというニュースが流れた。

これらの用法では、「言う」が本来持っている「発話」という語彙的要素が抽象化されつつも残っている。

2.2 「～というのに」における文法化

前節でみた用法と異なり、語彙的要素の抽象化が進み、「発話」の意味合いが残っていないと考えられる用法もある。

- (7)こないだ遭難したばかりだというのに、あきれた人たちね。（「釣りバカ日誌8」）
- (8)大事な下院議員選挙だというのに、肝心の大統領までこんな状態で果たして中間選挙に勝てるのでしょうか。（「ザ・ホワイトハウス」）

2.3 文法化の度合い

大堀（2002）によると、文法化には五つの基準がある。この基準をより多く満たしているものは、文法化の度合いが高いと考えられている。

- 基準1：意味のスキーマ性の度合い（具体的 スキーマ的）
- 基準2：閉じたクラスをなすか（開いたクラス 閉じたクラス）
- 基準3：標示の義務性（随意的 義務的）
- 基準4：形式の拘束性（自由形式 拘束形式）
- 基準5：文法全体の中で、他の部分と相互作用をもつか（相互作用なし 相互作用あり）

基準1は文法化の初期の段階から見られるが、基準4や基準5は文法化が進んだ段階のものである。「～というのに」という表現では、「言う」という意味の具体性が失われているのに加え、形式の拘束性も高く、相互作用もある。³⁾

2.4 他の逆接表現との比較

本節では、「～のに」と他の逆接表現との比較を試み、文法化の度合いやその用法について考察する。比較するのは、「～というのに」「～といっても」「～というけれど」の3つの表現。

まず、「～という」の語彙的要素の抽象化を比較する。「～というけれど」は、誰かの発話に対する疑念の表現「本当だろうか」を用いても、非文にならないが、他の2つでは非文になる。このことから、「～というけれど」は「言う」の抽象化の程度が低く、文法化もあまり進んでいないと言える。「～といっても」と「～というのに」は、「～という」の前節の内容に関しては、事実認識があると考えられる。

(9) 彼女は今年二十歳になったというけれど、本当だろうか。

(10) *彼女は今年二十歳になったといっても、本当だろうか。

(11) *彼女は今年二十歳になったというのに、本当だろうか。

次に、「～といっても」と「～というのに」について「二十歳(=大人)」と逆接の内容の「まだまだ子どもだ」を後節に用いた文を比較する。すると、どちらも「二十歳」であるという事実認識をしていながら、「～といっても」の方はその質に対する疑念を抱いている表現となる。

(12) 彼女は今年二十歳になったといっても、まだまだ子どもだ。

(本当の意味で二十歳(=大人)とは言えない)

(13) 彼女は今年二十歳になったというのに、まだまだ子どもだ。

(二十歳(=大人)らしくない振る舞いをする)

3. まとめ

「～という」と逆接表現が共起した場合の、「～という」の文法的な機能と文法化は、次のようにまとめられる。

～というけれど：前節の内容に対する事実認識に疑念あり(文法化の程度：低)

～といっても：前節の内容に対する事実認識に確信はあるが、その質において疑念あり

～というのに：前節の内容に対する事実認識に確信あり(文法化の程度：高)

注

- 1) ここでいう「一般的な用法」とは、日本語教育で頻繁に扱われる用法のことを指す。
- 2) 大堀(2004)では、「文法化とは、それまでの文法の一部ではなかった形が、歴史的変化の中で文法体系(形態論・統語論)に組み込まれるプロセスである。より具体的には、自立性を持った語彙項目が付属語となって、文法機能をにうようになる変化が、典型的な文法化である」ともまとめているが、本稿では、どの立場の研究者にとっても文法化と呼んで問題のない、より狭い定義を用いる。
- 3) 「という」に後接する形態素とその結びつきの強さ(毎日新聞(1991年))

形態素	tスコア	MIスコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
もの	26.27	11.72	24973	825	70.367
わけ	22.89	44.73	4348	548	12.251
より	16.31	10.33	11198	326	31.553
点	16.25	12.76	8650	311	24.373
気	9.358	13.63	2656	102	7.4839
べき	8.821	4.36	10662	131	30.043
のに	8.427	10.95	2788	86	7.8558
だけ	8.234	3.07	17210	149	48.493
ほど	7.529	5.93	4906	82	13.824
ところ	7.508	4.21	8183	97	23.057
ので	6.269	4.76	4700	63	13.243
訳	5.136	16.06	663	30	1.8681
つもり	4.247	7.51	1134	24	3.1953
くらい	2.715	4.05	1139	13	3.2094
けれど	2.465	5.6	570	9	1.6061

主な参考文献

- 大堀壽夫(2004)「文法化の広がりと問題点」『月刊 言語』2004年4月号 pp.26-33 大修館書店
- (2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 白川博之 監修(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 友松悦子 他(1996)『どんな時どう使う 日本語表現文型 500』アルク
- 他(2000)『どんな時どう使う 日本語表現文型 200』アルク
- 松岡弘 監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク